
オペラ座のプリンス ' s

琴田味夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オペラ座のプリンス，S

【Nコード】

N8826A

【作者名】

琴田味夏

【あらすじ】

聖鈴高等学校2年生の栗原亜希子。ミュージカル女優に憧れて音楽学校の聖鈴学園に入学する。でも歌はいまいちで不安だった亜希子の前に音大の研修生が来て……。

* 登場人物 *

* 登場人物 *

栗原 亜希子 くりはら あきこ

聖鈴高等学校2年生。性格は大人しい方で天然の女子高生。

ミュージカルの女優に憧れて小さい頃から学ぶが、成果はいまいち。

そんな亜希子に“音楽の天使”が……？

黒田 護 くろだ まもる

聖鈴高等学校で研修に来た音大の大学生。彼の音楽に対する才能は神童と呼ぶほどの天才。

だが彼の右の顔に仮面が付けており、周囲の生徒達は「ファントム」と呼ばれていた。

そして亜希子と出会った彼は……。

伊集院 雪斗 いじゅういん ゆきと

聖鈴高等学校3年生。亜希子とは幼馴染であり亜希子の印象では「優しいお兄さん」的存在。

大富豪の御曹司であるが、周りから信頼を受けていて生徒会長を務めている。

幼い頃から亜希子に恋をしていた彼は亜希子にプロポーズをするが……。

仲野 夢子 なかの ゆめこ

聖鈴学園高等学校2年生。亜希子の両親は5歳の時他界したため、仲野家で引き取って仲の良い姉妹の様な存在である。

彼女はミステリー物が大好きで、ミステリースポットを見つけて

は、よく亜希子と探検してる。性格も良く、亜希子の良き理解者。

仲野 なかの まりあ 真理亜

音大の生徒指導。夢子の生みの親であり、亜希子の母親である存在。

護とは縁があるらしいが……。

本能寺 ほんのうじ たまお 玉緒

聖鈴高等学校3年生。いつも自分に自信を持ち、上手くない歌を誇りに思っているが、周りの影では彼女の事を「ヒキガエル」と呼んでいる。

性格はほぼ悪く、周囲からも嫌われている。

プロローグ

小さい頃、父が死ぬ前に言ったの。

『お前の歌が聞きたい』

父の最期のお願いに私は歌った。その頃はまだ上手くは歌えなかったけど、父はとても安堵した顔で静かに息を引き取って涙がポロポロ流れていた記憶は今でも覚えている。

身寄りの無い私を引き取ってくれた仲野家の大黒柱の真理亜さんは、私にオペラのミュージカルに連れてってくれた。煌びやかかドレスを着ている女優達。紳士的な振る舞いをして歌う俳優達。中でも一番印象に残っているのは一人ステージの上で堂々と歌っている『牧野 千鶴』のステージが美しかったこと。『牧野 千鶴』はミュージカル女優でもっとも活躍している有名女優であり、当時私は彼女に憧れて同じ道を進むことを決意した。

真理亜さんは音大の教師を勤めており、音楽に憧れた私に歌のレッスンをしてくれた。（真理亜さんには娘の夢子がいて、一緒にレッスンをしていた）頑張って練習をしていたものの、成果はいまいち。毎日練習しても上手にはなれなかった。

一度は諦めていたが、大好きな歌を諦めたら今までのことは水の泡となってしまう。そう思って今日まで必死に勉強して、受験も必死の努力で合格することが出来た。

私が来月通学する高名は、『聖鈴高等学校』。

そこは、音楽と芸術という美術に優れた者が通う名門。ここでも有名な音楽家や芸術家が多く通っていた学校である。

この名門高等学校で繰り広げられる物語は、音大生と高校生の物語。

第一章

第一章

4月3日、早朝。仲野家の朝（夢子）は大騒ぎであった。

「夢子！早く起きなさい！！ご飯冷めるわよ」

キッチンで朝食の支度をしている真理亜は上でまだ寝ている夢子に声をかけるが、返ってくる返事は全く無い。眉間に皺を寄せてため息をつく、洗面所から聖鈴高等学校の制服を着た亜希子が笑顔で真理亜に朝の挨拶をする。

「おはようございます。真理亜さん」

「おはよう、亜希子。貴女は偉いわね。夢子もそこを見習ってほしいくらいだわ」

遠い目で階段の上を眺める真理亜に、亜希子は苦笑した。

「また今日も寝坊ですか夢子は？私が起こしに行きますね」

「いつも悪いわね」

「いえいえ！夢子を起こせるのは私しかいませんもの」

階段を上って夢子の部屋へ向かう亜希子の姿を見て真理亜は思った。一体どうやってあの寝坊助を起こしているのかと。

夢子の部屋のドアをノックして中に入る亜希子。部屋はとても可愛らしい小物やら芸能人のポスターが貼ってある夢子らしい雰囲気があり、オレンジと黄色の水玉の布団で未だ夢の中にいる夢子の姿があった。

「夢子。もう朝よ。」

体を揺さぶっても起きない夢子の手は亜希子の手を振り払う。体外そういう仕草をするとは時も虫と間違われて払うのが真理亜の癖だ。そして亜希子は部屋のドアを閉めているのを確認して、カーテンを開け、近くにあるMDコンポを取り出して夢子の耳に嵌めて一枚のMDを挿入して再生ボタンを押す。

健やかな顔で寝いていた夢子の顔がだんだん苦痛の表情に変わる。

そしてタイミングの良いところで音量を上げると、目を丸くして起き上がってMDコンポを剥がす夢子の姿を見て亜希子は満面な笑顔で朝の挨拶をする。

「おはよう、夢子。今日もいい天気よ」

「亜希子！普通に起こしてって言ってるでしょ！この曲どこから録音したの！？」

「だって……。これじゃないと夢子、起きないでしょ？普通に起こしても絶対目覚ましの時計でも無視できる貴女を起こすことなんて不可能なこと、自分でも理解しているでしょ？」

夢子は無言のまま俯いて小声で「その通りです」と自覚していた。

さきほど流した曲はベートーベンの『運命』。夢子はクラシックの中で一番嫌いな曲であった。前に一度、夢子はこの曲を聞いて鳥肌が立つほどこの曲に対して文句を言ったことがある。

「絶対こんなのが目覚ましだったら直にでも起き上がれるわ！」

その言葉で翌朝、未だ起きない夢子に『運命』を流した。すると夢子は直に起きたので、熟睡している夢子を起こす方法は『運命』を流すこと。

これが亜希子の楽しい日課となったのだ。

亜希子に起こされて下へ降りる夢子に真理亜はいつもの説教をする。

「夢子。もう17になってまだ起きれないの？明日はお母さん仕事で出張なんだから、亜希子に起こされないようにちゃんと日々努力をしなさい。」

「わかってます。」

大あくびを掻いてこんがり焼けたトーストにバターとイチゴジャムを塗って返事をする夢子に、またため息を吐く真理亜。心の中で今日も皺が増えるわと呟いた。

「大丈夫ですよ。ちゃんと私が自力で起きられるようにしてあげますから」

コーヒークップに淹れてあるミルクコーヒーを飲みながら言う亜希

子に真理亜は苦笑して「お願いね」と頼む。その時夢子は絶対に自力で起きなきゃと今ここで心掛ける。

第一章

朝食を済ませた二人は、真理亜に作ってくれたお弁当を持って学校へと向かう。

いつものバス停で友達と会話している同級生に挨拶をする。

「おはよう！」

「夢子！おはよう。また今日も亜希子に起こされたんでしょ？」

ズバリと言われて反論する言葉を出せない夢子。その隣で亜希子は小さく笑ってピースする。友達の『雪野 香苗』は別の高校だが、バスに乗るのは同じなので朝と休日出かける時は一緒にいるのである。

「今日からあたしら高2か。なんかパツとしないね」

「そう思っているのは夢子だけじゃない？」

「ちょっと！何よそれ！？亜希子ひどくない！？」

「私も香苗に賛成かな？」

「もうー！二人してー！ー！！」

楽しい会話は続いてついにバスが着いた。今日はかなり満員で、ドアで立っているのがやっとであった。人ごみの所為で夢子たちと離れてしまい、ぎゅうぎゅうに押される人ごみの中亜希子は必死に抑える。

（もうー。満員って憂鬱……）

そう思っている内にスカートに違和感があった。五本の指が亜希子の尻を撫でて、そのまま中に忍び込む。

セクシャルーハラスメント！！

怖くて声が出ない。暴れたくてもぎゅうぎゅうに挟まれている満員の中では身動きが取れない。反論出来ないまま指は亜希子の尻を愛撫する。段々手が奥へと進んでいく。

肌が粟立ち、血の気が引いて体が震える。心の中で否定しても、それは相手に伝わらない。目じりに涙が溜まり、硬く目を瞑る。

誰か助けて!!

亜希子の願いが届いたのか、愛撫する手が下着から離れ、後ろで男の人の声が叫んでいた。

後ろを振り向くと、中年のサラリーマンが悲痛の表情を浮かべていた。周りの乗客はサラリーマンの方へと視線を動かし、腕を掴んでいた若い男性が冷たい視線でサラリーマンを睨んでいた。

男性は漆黒の黒い髪をしていて、サラサラとした髪の長さは短髪で綺麗な顔立ちをしていたが、右の片方の顔に白い仮面を着けていた。「あなた。朝から痴漢行為をするのは最低ですよ」

男性の言葉に周りの乗客はざわざわと騒ぎ始めた。「セクハラ!？」

「何? 聖鈴高の子?」 「最低」 という言葉が降り注ぐ。場の雰囲気焦るサラリーマンは次のバス停に下りて逃げようとするが、男性はサラリーマンの腕を放さない。段々力が強くなり、額に油汗を掻くサラリーマンは亜希子に向かって謝罪する。

「悪かった! 許してくれ!! お願いだから手を放してくれ!! 腕が折れそうだ!!」

サラリーマンの悲痛の表情に胸がチクリとした亜希子は、仮面の男性に放してと懇願した。

「私は、もう平気なので……放してあげてください。」

男性は無言のまま、手を緩めて放した。サラリーマンは男性の顔を見て青ざめ、直にバスから降りて去って行った。場が収まった所でバスは動き出す。亜希子は助けてくれた男性にお礼の言葉を言う。

「ありがとうございます。とても助かりました」

「いいよ。当然の事をしたまでだから。次からは声を出して助けを求めらんだよ」

優しい声に亜希子はドキンと心臓が跳ね上がった。段々顔が赤くなるのを感じて俯くと、夢子と香苗が必死に亜希子の所へと進む。

「亜希子! 大丈夫?」 と夢子。

「ごめんね。離れちゃって」と香苗。

「大丈夫よ。この人が助けてくれたの」

男性の方を向くと、もうそこにはいなかった。不思議に思っ外の景色を見ると、もう聖鈴学校のバス停に止まっていて、降りる生徒たちの姿があつて二人は香苗と別れてバスから降りた。

「亜希子大丈夫だった？ 全く！ オヤジが変態な行為がするから、世の中の男も乱れるのよ！」

頭がカンカンになって仁王立ちで怒る夢子の隣に肺一杯に息を吸ってゆっくりと全部吐き出して気を落ち着かせる亜希子がいた。

「でも本当に怖かった。あの人が助けてくれなかったら、どうなっていたか」

『いいよ。当然の事をしたまでだから。』

あの優しい声が頭の中で蘇り、またもや赤面する亜希子。

心の中で、また会いたいという気持ちが高鳴り、二人は学校へ行く。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8826a/>

オペラ座のプリンス's

2010年10月10日02時00分発行